

かつて地球上には廃棄物というものはありませんでした。生産、消費、分解、還元が繰り返される自然生態系のシステムの中で無駄なものは一つもなく、すべて地球資源として緑の植物の再生産に組み込まれていたのです。人間も含めた動物は生態系の中で消費者であり、植物が唯一の生産者です。すべての動物はその生存を緑の植物に依存し、緑の植物の寄生者の立場で生きています。そして私たち人間や他の生物の排泄物や死骸などは、地中、水中、空中の小動物、微生物群によって分解されて、再び生産者である緑の植物に吸収されていきます。この物質循環の枠の中で人間も生きてきたわけですね。

しかし今や、長い間安定して機能していた生態系の枠をはるかに超える大量の廃棄物が家庭や企業から毎日排出され、また高度に発達した科学・技術によって、すぐには分解・還元できないような新しい人工物質、科学物質が日々生み出されて、大気や土壌、河川、海の汚染が広がっています。善意で行ってきた自然開発、都市開発、産業立地づくりも環境破壊につながっています。二酸化炭素CO<sub>2</sub>や排気ガスの排出量も急速に増加して、地球温暖化が加速し、世界各地で異常気象が引き起こされています。

科学・技術によって生じた環境問題は科学・技術によって解決するという考えから、現在発生源対策など個別のハードな対応がさかんに進められています。もちろん個別の対応は確実に行わなくてはなりません。しかし、環境問題は、科学・技術的ではなく、個別対応だけで解決できるものではなく、時間と空間のトータルシステムとして捉えるべきです。基本的には一人ひとりのうちの問題であり、心の問題です。地球温暖化対策としてバイオ燃料の利

用やCO<sub>2</sub>排出量の売買などが実施されることになりましたが、あまりにも小手先の対応ではないでしょうか。今年(二〇〇八年)七月に開催された主要国首脳会議(洞爺湖サミット)では二〇五〇年までに温暖化ガスを半減するという目標を世界全体で共有する」という宣言が採択されました。しかし果たしてこのまま達成できるでしょうか。

現在私たちは、さまざまな非生物的材料からなる空間での生活を余儀なくされています。高度なエネルギー・物質文明の中で、私たちは、生きていく物と死んだ物、毒と毒でない物、本物と二セモノを見分ける生物的本能を失いつつあります。明日を間違えずに健全に生き延びていくためには、これらの本能を甦らせ、人間しか持つていない知性、感性をより活性化させることが大切です。また、「競争しながらも互いに少し我慢して共生する」という植物社会の掟を正しく理解し、共有することも重要で



宮脇 昭 (みやわき あきら) 植物生態学者  
講演会 平成23年11月26日(土)

生きていく上で最高条件が必ずしも最適条件ではありません。生理的欲望がすべて満足できる最高条件の少し手前の、やや厳しい状態こそ、生態学的な最適条件であることを、長い間の歴史は教えています。約四〇億年間途切れることなく続いてきた地球のいのちの歴史を見つめ直しましょう。そして、現在危機に瀕している地球環境と森林の劣化・消滅の現実を直視してください。

私たち人間が主役である地球上のいのちのドラマは、決して悲劇に終わらせることはできません。少々厳しい状況でも我慢しながら生き延びる努力をするべきです。緑の植物が濃縮した立体的な土地本来の森は、照葉樹林域では主木が深根性、直根性であるため、台風や地震にも簡単には倒れません。葉は常緑で水分を含み、火事の際には延焼をくい止める働きがあります。その他 防音、防塵、防風、大気浄化、斜面保全、水分保持、水質浄化など、さまざまな災害防止・環境保全機能を果たします。グローバルにはCO<sub>2</sub>を吸収・固定して、地球温暖化が進むのを防止します。また生物多様性を維持し、そこに生まれ働いている人たちのいのちを未知の要因も含めてトータルに守ります。

NHKころろをよむ『地球環境へのまなざしあなたとあなたの愛する人のために』  
編集／日本放送協会  
日本放送出版協会  
著作／宮脇 昭 より



隼人町神宮1丁目の  
児童公園です。  
面積7㎡、9種22本の森です。  
(平成21年5月17日植栽)

2年3か月でこんなに  
大きくなりました。  
(平成23年8月22日撮影)



小さな森(ポケットフォレスト)